

町田市がごみ処理にバイオガス化施設を導入

日の出の森・支える会運営委員 大沢ゆたか

現在、三多摩各地で清掃工場の更新が進んでいます。ふじみ衛生組合（三鷹市・調布市）でも2013年より新しい焼却炉で運営を始めています。立川市でも2023年稼働予定で新しい焼却炉を新たな場所に造るための準備が進んでいます。昭島市の古くなった焼却炉は現行の西多摩衛生組合に合流することで話を進めています。昭島市からは反対の声も上がっています。小金井市と国分寺市も日野市の新しい清掃工場に合流する計画がありますが、地元からは反対運動が起こっているところです。

町田市では施設更新に合わせ、可燃ごみの焼却施設（ストーカー方式 258t/日（129t/日×2炉））、生ごみのバイオガス発酵施設（乾式高温メタン発酵 50t/日）、不燃・粗大ごみ処理施設（45t/5h）の3施設を造ります。同施設は敷地面積が77,000㎡（立川市の新清掃工場予定地は13,000㎡）と十分広いので余裕の3施設を建設できます。

特徴は新たなバイオガス化施設を導入して生ごみをリサイクルすることです。東京では2004年に事業を開始した民間会社「バイオエナジー株式会社」が食品廃棄物をリサイクルする一環として焼却ではなく、微生物で分解し、メタンガスを主成分とするバイオガスを回収し、そのバイオガスをガスエンジンで発電し、電気と熱のエネルギーを生み出し、さらに都市ガス精製設備で都市ガスを造り提供をしています。

町田市のこの施設は2016年に契約し、設計から建設の5年間とその後の20年間の運営と旧施設の解体まで含んだ委託事業です。25年間の総計額427億円（施設整備費270億円、施設運営費157億円）と巨額です。しかし、立川市の施設運営費と、ふじみ衛生組合の焼却炉建設費用101億円を考えるとそれほど大差のない価格と計算できました。立川市でも新清掃工場建設で焼却炉とバイオガス化施設の複合化を検討しましたが、敷地の面積の圧倒的な狭さで2施設を造ることは無理で焼却炉だけになる計画が進んでいます。

バイオガス化施設は小さいものを含め、すでに全国各地50か所ほどにあります。町田市では燃やせるごみの40%を占めるといわれる生ごみをバイオガス化処理してごみを燃やす量を減らし電気エネルギーを生み出す取り組みは優れていると思います。広がっていく可能性があると思います。

